**貧しき自分に気づく 2017 4/9**

**マタイ 26:14-27:66 スティンストラ牧師**

マタイ福音書において、イエスを死に向かわせる連続的な出来事のストーリの中には、不名誉な裏切り者の悲しい話術が複雑にからみあっている。　本日の福音書箇所では、ユダは一人の注目すべき役者であり、他の弟子たちとは異なる言い方をして、あっぱれである。というのは、イエスを十字架への道を歩ませるために、卑劣な取り引きでイエスを司祭の手にわたしてしまう。決して高価とはいえない、たった銀貨30枚で取り引きしてしまっている。しかしその汚れたお金がユダの手に渡った途端に、彼の悪に満ちた行為を行なう機会をうかがうことになる。そして2節後には、イエスが弟子たちに、時期が近づいてきていることを知らせ、わたしたちも物語はいよいよ終盤になっていることを予感せざるをえない。

そしてイエスはよく知られている最後の晩餐の場面に現れる。過ぎ越しの食事を祝うために12弟子たちが集まったということは現代の私たちも知るところである。イエスは席に着くとすぐに、親しく従ってきた12弟子たちの中から一人がイエスを裏切ろうとしていると話し、弟子たちを唖然とさせる。とはいうものの、いまからでもその背教者が決心をくつがえして、悲惨な結末にならないようにすることも可能であるということも示唆している。　弟子たちは互いに次から次へと「主よまさかわたしのことでは」と言いながら自分が裏切り者ではないことを確認している。それゆえ部屋の空気はあきらかに緊迫している。そして最後にユダの順番に来たとき、彼は二番目の決定的な段階に踏み込むことになる。彼の応答はあきらかに異なっていて、他の弟子たちから彼自身を遠ざけてしまう。　彼は「先生、まさかわたしのことでは」と述べるが、それは無意識に「先生」という呼び方をイエスに使ったことで、イエスを裏切ることにした者が聖なるものの権威によって取り調べられたりしないようにするかのようだったが、実際は彼の言葉はただ主イエスに聞かれるだけに終わらず、さらに会話が続くものとなった。

しかし、このようなやりとりの後でも イエスはユダを少人数の核となる弟子のグループから排斥することはしていないようだ。他の弟子たちと同じく、ユダも救い主の体をいただき、罪の赦しのために注がれた契約の血を飲むよう招かれている。そして招かれても、決してユダの決意を方向転換することにはならなかった。イエスがユダに食事を与えた後も、彼は宗教指導者たちとの卑劣なとりひきを守って破壊の道をくだり続ける。そしてはっきりいつとはわからないが、ゲッセマネの庭でイエスを逮捕する武装集団といっしょになるためだけに、弟子たちからは離れる。武装集団はイエスの逮捕のために最適なタイミングを計るためにユダの助けが必要なだけにユダが弟子たちから離れてしまうのは信じがたいことだが、あえて弟子のグループの中に残ってその機会を見計らうことはしない。そして彼は躊躇することなく、イエスのところに近づき、守衛たちに約束していた通りイエスにキスをするという合図を行なう。しかし、私たちは彼のみが主に向かって非難の指を示したと考えるなら、彼だけが断罪されるに値することになる。つまりイエスがだれかが私を裏切ることになるという賭け事のような話題を弟子たちに述べる前は、イエスはユダを「友」と呼んでおり私たちもイエスがユダを憐れみ深く扱っていたのに、その後は私たちはユダだけしか裏切り行為の実行犯としか扱うことになる。

ユダはイエスが死刑判決を受けた時になって、彼の取り返しのつかない決断が彼の上に重くのしかかってきた。マタイは背信行為からくる耐え切れない罪の意識がユダの中に湧いてきているのを描いており、その意識が完全にまた彼の知る限りの方法で後悔を迫っている。ユダは無罪の血をもたらす背信行為という悪意から獲得した銀貨を返し、イエスを売るという恥ずべき行為に対する罪滅ぼしのため自らの命を断つ。　そして私たちは、イエスの流された血、罪の赦しのための血は、その血をもたらすために犯した罪を特別に赦すことはできないのかと考える。

しかしユダという名前は裏切りや背信行為と同義語となり 教会では何世紀もの間、触れてはならないのけ者とされ、この物語のたった一人の罪人で普通の人々とは大きくかけ離れた存在であるかのようにしてしまった。真実は他の選ばれたイエスの弟子たちや現代の自称「イエスの従者」だと言っている完全ではない人々となんら変わらないのである。我々は自分たちをよく見せるため、悪いのはユダの行なった唯一つの事であるかのようにしてしまう。なにか物事が大きく脱線してしまってどうしようもない悪事が起こった時に、ユダのような人間に全面的な責任を押し付けてしまい、わたしたちはユダに比べてより神聖なる生活を送っていることが唯一の望みであるかのごとくである。そこで、いまいちど血まみれで不義に満ちたイエスの死のストーリを聴くにともない、そしてその悲惨な話の中でユダが大きな役割を演じているわけだが、私たちがあたかも孤独な裏切り行為に走ったユダの棺おけに一本また一本と釘を打ち付けるように自らを正当化する喜びを感じてしまうのも無理は無い。

しかし私は神の愛と恵みは私たちにはこの上もなく意味深くあるのではないだろうかと考える。またもし私たちがこのストーリから取り去るべきこととしてもっとも矛盾に満ちた機能しなかった弟子の罪は横に置かなければならなかったとしたらどうだろうか。もしイエスが誰にとっても救い主だとするなら、彼の憐れみは誰にでも注がれているのではないのか、貧しく老いた者でも、皆が知る者はだれでも、弱々しき者あるいは自分の過去のすべての過ちを決して赦せない憐れむべき者、したがってイエスも決して赦すことも他のだれかに罪を着せるようなことはできないのだと考えてしまうような者にも。マタイはユダのことを特別扱いしているわけでもなく、私たちの自由なそして勝手な考え方に基づいてユダに罪を着せるスケープゴートのように扱えば良いとは全く言っていない。もしろマタイはユダのどうしようもない失脚について記述するなかで、私たち自身も彼と似たようなところがあることに気づき、救い主の必要性を認識できるように、そしてイエスの良き知らせの豊かさを忘れてしまって苦しみながら生きるようにならないよう導いているのだと思う。ユダを私たちの兄弟としないならば、イエスに従って生きるといっても、自分たちが過ちを犯した際それに気づかないかもしれず、イエスが贖ってくださることの意味を見出せなくなってしまう。かって私よりはるかに賢い方が、まさにこのような事を語ってくれた。ユダはそもそも最初の背教者なんかではない。ユダは一人の典型的ユダヤ人でしかない。

そして、ありがたいことに私たちがこの話のなかには、わたしたちのようにイエスの十字架刑の原因になっている者たちへの非難がいっさい書かれていないことだ。私たちはユダ以上に非難されるべき人を想像できないが、イエス自身は決してユダを完全に亡き者にしてしまうわけではない。　私たちがもし本来の自分より信仰深い者であるかのように振舞うならば、イエスはそのようなみえすえたまねごとにはのってこない。　その代わりに、イエスは沈黙を守り、ただ十字架で苦難を受ける。そのイエスの十字架上での苦難と死は、私たちにこの世のどんな残虐な暴力よりも強い神の頼りになる私たちへの信仰に気づかされる。人類がイエスを死に追いやる選択をした後でも、イエスは約束していた通り世界でもっとも心のこもった食卓にやって来て、罪人である私たちに会い、私たちは神の愛する子どもたちとして新鮮なるスタートを切れるという恩恵を私たちが受け取るという門戸を開いてくださる。　アーメン